

《要旨》 倒壊した状態で発見された山田寺の回廊の建築部材からは、現存する法隆寺西院の回廊と比較できるほど詳細な建築技法や様式を見出すことができませんでした。その結果、現存建築の位置づけも再考に迫られました。新たな現存古代建築の発見は望むべくもありませんが、発掘調査によって新たに建築遺構が発見され、現在の日本建築史の教科書が書きかえられる可能性があります。また、現存建築がごく限られている七世紀の建築の場合、新たな発見が東アジアの建築史やその社会背景にまで及ぶかもしれません。本章では山田寺回廊の発見を通して、波及する建築史的問題点に言及し、古代建築史研究のおもしろさを紹介します。

はじめに

山田寺の回廊は、**図1**の状態で見られました。まさにバツタリと倒れた状態で見つかったことがわかれると思います。これは建築遺構の検出という表現ではなく、地中からの建物の出現、あるいは「出土建築」といった表現のほうがふさわしいかもしれません。建築部材が組まれた状態で発見されたことにより、細かな建築技法や様式についても知ることができました。

これを現存最古の木造の回廊である法隆寺の西院伽藍回廊（八世紀初頭）と比較検討したところ、いくつか共通する様式も見いただけますが、まったく同じではないことが判明しました。建築史は建物の歴史を研究する学問ですので、研究の基礎は、現存する建物を対象として、当時の建築様式や技法の変遷を究明することであり、こうして建築史の教科書がつくられてきました。その教科書を、



図1 発見された山田寺の回廊（南から、第6次調査：昭和59年）

この「出土建築」が覆したのです。さらに建立当時の歴史的背景を考えると、この山田寺の「出土建築」のもつ意義は、さらに広がりを見せそうです。

この山田寺の例は、発掘事例のなかでもきわめて特異と言えますが、出土建築部材は、少なくとも埋没する以前の建築技法や様式を直接知ることができ点で、今後の建築史の構築に大きな可能性を秘めています。ここでは山田寺の「出土建築」について概観し、その意義を再確認してみたいと思います。

一 山田寺と倒壊回廊

山田寺の創建 山田寺は、奈良盆地東南部の丘陵東麓、現在の奈良県桜井市に建てられました(図2)。奈良盆地東南部の少し南に張り出した平地が、日本最古の寺院である飛鳥寺や、天武天皇の飛鳥浄御原宮が営まれた飛鳥地域(奈良盆地東南部全般を飛鳥と呼ぶこともあるが、ここではもつと地

域を限定している)で、山田寺はそこから北東へやや離れたところに立地しています。その目と鼻の先には、倒壊回廊が復原展示されている飛鳥資料館があります。ちなみに、藤原宮は山田寺からみて北西の方向にあります。

山田寺の歴史は、『上宮聖徳法王帝説』という文献の裏に書かれていた記事により、かなり詳しくわかっていきます(表1)。舒明天皇十三年(六四二)に「建立の地を定め整地する」という記事があり、皇極天皇二年(六四三)にはまず金堂が建立され、大化四年(六四八)には僧侶が住み始めています。山田寺を創建したのは、蘇我倉山田石川麻呂という蘇我氏の一族ですが、乙巳の変(大化の改新)では、中大兄皇子らに組して、蘇我蝦夷・入鹿らの本宗家を滅ぼした人物です。ところが、石川麻呂は謀反の疑いをかけられ大化五年三月二五日に、息子の興志らとともに自害してしまいます。施主を失って山田寺の造営は頓挫したようですが、石川麻呂は金堂と回廊、中門などが完成した姿はみることもでき

たようです。大化五年から天智天皇二年(六六三)にかけての

表1 山田寺の歴史

舒明 11年 (641)	建立の地を定め整地する
皇極 2年 (643)	金堂建立
大化 4年 (648)	僧侶が住み始める
大化 5年 (649)	3月25日：石川麻呂、謀反の疑いをかけられ自害
天智 2年 (663)	造塔に着手
天武 5年 (676)	塔完成
天武 7年 (678)	丈六仏を铸造
天武 14年 (685)	丈六仏開眼 (= 講堂完成)
治安 3年 (1023)	10月17日：藤原道長、山田寺を参詣
(10??)	東面回廊倒壊
文治 3年 (1187)	興福寺東金堂衆、講堂の丈六仏を奪取し、東金堂の本尊とする
応永 18年 (1411)	興福寺東金堂火災、本尊の御首のみ取り出す
昭和 14年 (1939)	仏頭、興福寺東金堂の須弥壇下で発見



図2 山田寺の位置